

耳我嶺の所在について

平山城児

これは、淵源をたずねるとやや古い話となるにしても、事は簡単で、骨だけ書けば数行でおわってしまふ報告記事にすぎない。しかし、骨だけではあまりにもそっけないので多少のあやを補うが、なるべく簡潔に書くつもりである。

主題は天武天皇の長歌(巻一・25、26)に詠みこまれた「耳我嶺」が現在のどこにあたるのか、という古くて新しい疑問である。本稿では従来の諸説を掲げて検討するのを主眼とはしないので、試みに「万葉集全注」のその項の記述を転記すると、次の通りである。

吉野山中の一峰であろうが、どの山か未詳。金峰山をあてたり、多武峰と吉野の境い、今の細峠・龍在峠一

帯をあてたりする説がある。天智十年(六七二)十月、天武天皇が吉野入りをした時は、芋峠を越えた可能性が高い。この峠一帯を擬することもできる。

力点のおき方はともかくとして、簡潔に書こうとすればおおよそ右のように書くより仕方がないだろう。

さて、私が初めて徒歩で芋峠を越えたのは、昭和五十三年二月十九日であった。飛鳥駅を午前七時二十分に出発し、途中少々道に迷ったりしたあと峠を越え、干股を経て上市の河岸で握飯を食べて三十分休息し、さらに歩いて宮滝に着いたのが十二時五十分であったから、正味五時間かかったことになる。その時は、とに

かく天武の心境になるべく近づきたいという思いだけがあつて実行したのである。寒い冬で、登る道は山陰になると真白に雪が積もっていた。

その後、別のことで大変重宝した「大和地名大辞典」(昭27・10、大和地名研究所)という書物の威力を知ってから、その索引でミミガノミネはないかと探してみた。その辞典は、奈良県全体の小字の名前をすべて収録してあるのである。見ると、ミミガノタケはさすがになかったが、ただ一か所だけミミガタニという小字があった。それは大字平尾の近くにあるらしい。ということとは、細峠・龍在峠・芋峠と、東から西へ三つ並んでいる。いずれも天武吉野越えコースの有力候補地からくだったところにある山麓の集落のひとつが平尾であるから、この小字ミミガタニの位置を確認する必要があるが生じて来た。

しかし、関東の住人がそう簡単に調査に行けるわけもなく、荏苒として時をすごしてしまった。そして、昭和六十三年九月十七日、機会を得て吉野の民宿のご

主人に事情を話したところ、知人に連絡をとって下さり、ミミガタニへの案内も知ることが出来て、翌十八日単独でその地をたずねた。津風呂湖の水はどこまでも青く、龍門岳が雄大な姿を湖面に映じていた。その後の煩雑ないきさつは略すとして、結論だけのべるならば、当時教示された場所は小字グミガタニであつてミミガタニではなかつたことが、現在はわかっている。その翌日、つまり九月十九日、津風呂湖側の志賀から滝畑たきのぼた經由で龍在峠を越え、冬野を過ぎ、石舞台の近くへおりて飛鳥の板蓋宮址まで歩いてみた。三時間五十分を要した。

右の経験に懲りて、平成三年七月一日、あらかじめお願いをした上で、吉野町役場の奥田昌弘氏を訪ねて、地籍図・土地台帳などの閲覧を許された。その後、奥田氏から紹介された平尾の榑本安雄氏の先導で津風呂湖へむかった。現地へ着くと榑本氏は小字ミミガタニをたちどころに指し示され、あまりに簡単に事実が判明したために、これまでのさまざまな体験が一瞬空しく思われたほどであつた。

付図(1)



昭和32年12月発行の地理調査所による、五万分一地形図「吉野山」による。

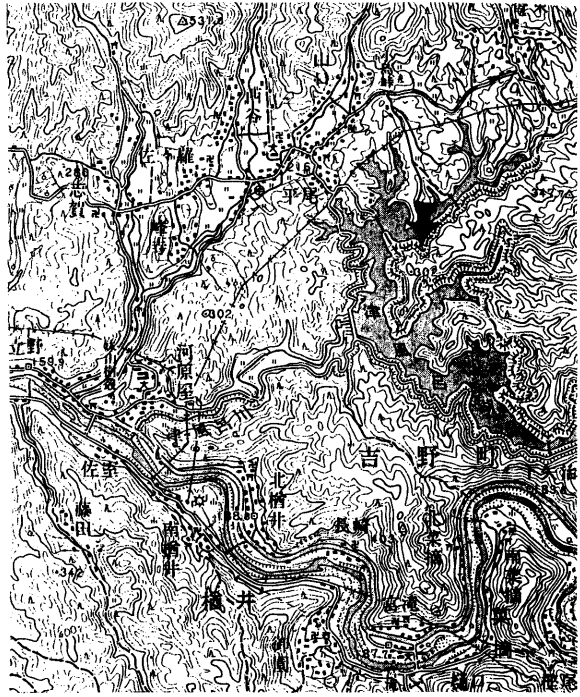
→の指す部分がミミガタニ。

-----は当時の里道。

地籍図・土地台帳によると、ミミガタニという小字は少々離れて二箇所があり、いずれも一畝ほどの僅かな土地（山林）を指している呼称のようだ。その場所は付図(1)に示す所で、同じ場所を津風呂湖に水没以前の姿で示すならば付図(2)のようになる。ということは、細峠—西谷—

平尾—鬼輪おにわ—上津風呂という、ほぼ一直線の里道がかつて存在し、しかも上津風呂からひと尾根越えると南側は菜摘で、そこから宮滝まではほんの少しの道のりである。ミミガタニという小字は、そのコースの一部に触れている地名である。ミミガタニの反対側が鬼輪である。谷が

付図(2)



昭和44年4月発行の国土地理院による五万分一地形図「吉野山」による。

ある以上、谷の両側あるいはその上部は峰であるから、そのあたりをミミガネと呼んだ可能性はないとはいえない。

龍在峠と細峠とは、標高(龍在峠七五〇メートル、細峠七〇〇メートル)も平地との標高差(龍在峠と平尾とで五五〇メートル、細峠と平尾とで五〇〇メートル)

ル)もさして変わりが無い。そもそも峠自体の位置も二キロ足らずの距離を置いて東西しているのだから、どちらを利用してしてもそれほど変わりはないといえる。

明日香からの道も、栢森から芋峠へ行かないで入谷を経由して龍在峠へ行く道もあったし、畑の集落を通って冬野経由で

龍在峠へ行く道、島ノ庄から細川經由で多武峰へ出てから龍在峠あるいは細峠へ出る道など、いくつもの道があつて甲乙つけがたい。それらの道の中から天武の通つた道を一に特定することは永遠に不可能のような気がする。

それにしても、明日香方面からいづれかの道を登つて龍在峠あるいは細峠に達し、そこから津風呂經由で菜摘そして宮滝へむかうというコースは、天武にとつて最も迅速に吉野離宮に達する道であつたと思う。津風呂から山越えして菜摘へ出てから宮滝へむかうのは迂路ではないかという反論も予想できる。しかし、菜摘から宮滝までは二キロか精々二キロ半の平坦な道である。芋峠から千股經由で上市へ出て吉野川ぞいに延々と宮滝まで来る道に比べれば、少々險阻ではあるかもしれないが、島ノ庄(天武は鳴宮にいたと天武紀にある)から畑・龍在峠經由で細峠から平尾におり、ミミガタニの近くをかすめて津風呂・菜摘とたどる道の方が、はるかに早く宮滝に達することができるかと確信する。これから天下分け目

の決戦を始めようと決意した天武は道を急いだに違いないし、そうだとするならば、なるべく最短距離を目ざしたはずである。

以下は補足である。奈良県立図書館に「明治十六年 村誌」と題する何巻もの文書の綴じこみがある。明治十六年に奈良県下の各村ごとになされた、人口・特産品・道路・学校・神社・仏閣・伝承などについての調査報告書がそのまま袋綴じになっているもので、すべて毛筆書きである。その志賀村の記述の中に「金福寺廃寺趾」という項目があつて、金福寺の縁起がのせられている。相当長い文章なので最初の部分だけを写しておく。

村ノ西方字大松ニアリ東西十三間三分南北十間六分當時古記ニ曰ク鷹塚山大海院金福寺縁起粵ニ謹テ大和ノ国吉野郡龍門郷志賀ノ村鷹塚山大海院金福寺建立ノ縁由ヲ按スルニ往昔人王三十九代天智天皇ノ御曆十年辛未ノ年ノ草創ナリ寺ノ濫觴ヲ尋ルニ清見原ノ天皇ノ開基ナリ清見原ト号スルハ天智天皇ノ御弟ナリ後ニ

天武帝ト号スルナリ幼ナキ時ヲ大海人ト名ツケ玉フ天智帝王位ヲ此ノ御弟清見原ニ禪リ玉フ然ルニ天智帝ノ実ノ皇子ニ大友ト名玉フ有リ天智ノ帝崩御ノ後王位ヲ諍ヒ叛逆ヲ起シ清ミ原ヲ襲フ其ノ時清見原逃テ此所ニ来御アリシ時林木鬱茂セル其中ニ一ツ柴ノ菴アリ見ルニ老嫗アリ天皇問テ曰汝何ナル故カ此ノ深山ニ住ムヤ

(以下略)

以下の物語を簡潔にまとめると、こんな風になる。大友皇子が鷹と犬を連れて大海人皇子を搜索しにくるが、皇子を鷹塚の中に隠して老嫗が取りつくろうので発見されずにすむ。その後も皇子は国栖ノ翁の漕舟舟によつて危うく脱出するといった一幕もあり、壬申の乱が終わつてから皇子がここへもどつてくると、老嫗の姿もない。しかし空中に声あつて、かの老嫗は地藏菩薩の化身であつたことが判明し、天武みずから伽藍を建立し地藏菩薩像を安置したという。この縁起譚自体は地藏信仰が主軸になっているので、恐らくは鎌倉時代以降に成立したもので

あろうけれども、天武の、しかも壬申の乱にまつわる伝承が、さきに想定した龍在峠から津風呂への経路の一部に伝わっているということは、私にとつてのささやかな傍証である。また、樹本氏は、鬼輪のあたりを神武天皇が通過したという言い伝えがあると語つて下さつた。

また、前述とは逆方向になるが、菜摘からひと山北へ越えた津風呂湖畔に津風呂春日神社という小社がある。そこに「旧津風呂区民」の立てた看板があり、「津風呂春日神社の由来」を記してある。その冒頭にいう。

ここは古く日本書紀に見える「津振」の地である。約千三百年前(六七二年)大海人皇子(天武天皇)と鷓野皇女(持統天皇)が吉野離宮(宮滝)から御峠を越えてこの地に到り、隊伍を整えて宇陀から伊賀伊勢へと出陣せられた。世に言う「壬申の乱」の出発地点に当る。(以下略)

これは天武紀の壬申の乱の出発の記事をやわらげて書いた文章であらう。「津振川に遠りて、車駕始めて至れり。便ち乗

す。」とある「津振川」は津風呂川のことであるから、天武は菜摘側から津風呂側へ越える時は臣下とともに徒歩で越え、津風呂春日神社が以前建っていた湖底のあたりで初めて馬に乗ったのである。そこから鬼輪を経てミミガタニをかすめ平尾に出る道が、先に想定した細峠からの道の逆行にあたるが、平尾まで出てしまつと、三茶屋みぢやを経て大宇陀町へ出る伊勢街道であるから、この道は当時でもかなり整備された幹線道路であつたと思われる。かくて、「即日そのひに、菟田うだの吾城あきに到る。」

(天武紀) ということになる。

末筆ながら、私の唐突な申出に対して、充分な資料を準備し榊本氏と共に現地の案内までして下さつた吉野町役場の奥田昌弘氏と、すでに水没してしまつた津風呂湖底にかつてあつたさまさまな小宇や里道の道筋などについて、さながら掌中のものを指し示すかのように教示して下さつた榊本安雄氏のお二人に謹んで謝意を表して、私のつたない報告を終わりたい。

(平成三年七月二十七日記)